

## 《2004年3月例会報告》

【期 日】2004年3月9日（火）19:00～21:30（その後東向島駅前の養老乃瀧で飲食～24:00頃＝終電ぎりぎりアウトぐらい）

【会 場】現代美術製作所内 Guess sport?スタジアム（東武伊勢崎線「東向島」駅下車徒歩3分）

【テーマ】歯磨き感覚でスポーツは可能か？

【発表者】中塚義実（サロン2002代表） 井関信雄（アーティスト）

【参加者（会員）】麻生征宏 安藤裕一 上間匠 澤井和彦 竹中茂雄 中塚義実

【会員外参加者（順不同）】土谷享・車田智志及（アートユニット・KOSUGE1-16） 曾我高明（現代美術製作所） 井関信雄（アーティスト） 高原宏（スポーツクラブとくしま／大塚FCサポーター） 石川智洋（（株）リクルート） 安藤文絵・岡野啓子・松田美樹・宮葉子（I AM） 石川良男（墨田聖書教会） 細谷知子（Atmix Sweets!） 清水永子（「樂の会」） 國府田典明（足立区在住） 戸嶋千夏子 田中宏嗣 尾山均

【配布資料】①ロケーション/ディスロケーション（井関）

②歯磨き感覚のスポーツライフは可能か？（中塚）

【報告書作成者】上間匠

注）参加者は、所属や肩書きを離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

### 歯磨き感覚でスポーツは可能か？

中塚義実（サロン2002代表）、井関信雄（アーティスト）

\*\*\*\*\*

#### 【1】はじめに

1. 今回のサロンでは、サッカーというグローバルで巨大なスポーツと、スケートボードという都市機能の末端部分を住みかとしているローカルなスポーツ、この2つの陰と陽を対比させながら、「歯磨き感覚」で可能なスポーツのあり方、文化のあり方を考察したい。

#### 2. 会場について(曾我)

現代美術製作所は現代アートの展示を行っているスペースで、今回のスタジアムも展示物であり、かつ実際に遊ぶこともできるリレーショナルアートという表現の一つ。会場だけでなく、参加者自身やシンポジウム自体も作品の一部である。

奥の展示室では、「スポ研」という、即興的に新しいスポーツを作る活動の部室がある。このようにスポーツのあり方を考えることが、アートのあり方を考えることにつながるのではないかという考えのもとに数ヶ月展示を行っている。

このシンポジウムはフェスティバルでもあるので、参加者個人個人が楽しんでもらえばと思う。

#### 【2】発表

<1>スケートボードからの視点（井関）（資料配布）

私自身は、小学生からスケートボードをやって、現在は、することより、スケートボードをしている人の写真を撮って作品にしている。

スケートボードの歴史(資料参照)は諸説あるが、1940年代にアメリカ・カリフォルニア州で、木の板に鉄製の戸車を付けて滑った遊びが始まりとされている。60年代中頃に商品化され、主にサーフィンの陸上練習用として流行。その後もいくつかの波を経て現在に到っている。

## 1. スケートボードの魅力

### (1) ローカリティ(locality)

スケートボードには「この街のこの縁石を攻めるのは自分だけだ」というような、物理的に非常に小さな範囲というローカリティがある。本場といわれるアメリカはあるけれども、今いるこの現場がスケートボードの最前線になり得る。というのは、今自分がいる現場で何ができるかというのがスケートボードでは重要だからである。だからこそ始めはサーフィンの練習用であったものが、地域に根ざす形で普及してきた。グローバルに普及しながらもローカルな面が魅力であるという不思議さが、スケートボードでは自然な形で達成されている。

また、大阪や東京、沖縄など、地域にチームがあり、それぞれが異なった文化を持っている。

賛否両論あるが、大会はストリートの面白さがある意味去勢して、持ち時間1分の中でのパフォーマンスが得点化される(その基準は日本スケートボード協会が定めたもの)。そこでは下手な人でもパフォーマンス性が高ければ評価される。しかしそれに反して、持ち時間中に会場をどれだけ盛り上げられるかを評価するといった、自分達でローカルルールを作ることもよくある。

スケートボードやインラインスケートなどを総称した X-game(extreme sports からきた)は、それぞれのスケーターの持っているローカルルールで楽しめるのが魅力だろう。サッカーでも、子どもの頃には公園の地形などからそれぞれのローカルルールを持っていたりするのと同じではないか。

### (2) それぞれのスタイル

スケートボードの面白い点は、上手いわけではない人も主人公になれるところである(ビデオ上映)。このビデオは、大田区で個人が主催する大会の様子で、下手な人も上手い人も、年を取った人もチビッコも、誰でも簡単な木材で作られた同じ地形で滑っている。

### (3) 枠の外に飛び出す意識

枠組みを作るのだけれど、常に外側に出ようとする意識のようなものがスケートボードに本質的に含まれている気がする。

## 2. プライベートとパブリック

またスケートボードには、プライベートな視点とパブリックな視点があると私は思っていて、プライベートを突き進むことが同時にパブリックなことを進めることになると思う。プライベートな視点とは、「いま目の前にある物を上手く飛ばす」というような技に熱中するようなものだが、突き詰めるとあるところ(年齢的なものかもしれないし、技術的なものかもしれない)からパブリックなものに変わる。大田区の大会も、個人がプライベートな視点から「もっとスケートボードができるところを増やしたい」というところから、大会を運営する事で地域にスケートボードを根付かせ、公設のスケートボード場を作ることに促すパブリックなものに繋がっている。

## 3. スケートボードの現況

年齢は10代から20代後半くらいまでがメインで、下は9~10歳くらいから37歳が、ビデオで見せた大会の最高齢。

アメリカでは、定年付近の方々も多いと聞く。日本では 57 歳が、身近に知っている最高齢。

彼らは普段はストリートでやっているが、最近 5 年ほどは公設のスケートボード場ができはじめている。街中で迷惑をかけてやっているスケーターをどこか一箇所に追い込んでやれば、街としても手がかからないという考えと、他人に迷惑をかけずにできる場所が欲しいというスケーターの方の考えが合う形で、公設のスケートボード場ができた。日本で初めてできたスケートボード場は神奈川県にあり、バスケットなどの球技場と同じように設置されている。

#### 4. 質疑・感想

(質問)公設のスケートボード場となると、「この街のこの縁石」という楽しみはできなくなるのではないかな？

井関：自分の考えでは、非合法的にゲリラ的に街を攻略していく楽しさと、純粹にスポーツとしての楽しさと両方あり、それがスケートボードだと思っている。だからオリンピック競技などにはなりにくいと思う。どのようにすればよいかという教科書はなく、みんなそれぞれが自分のやり方で主人公になれるというのも魅力だろう。

(質問)例えばサッカーならゴールを決めるのが目的だが、スケートボードではどうなったら良いのか？ どういうことをやりたいのか？

井関：自分は現在、ハードにはスケートボードをやっておらず、主に写真を撮っているが、写真を撮るということもスケートボードの楽しみ方の一つであると思う。プレイするだけではなくて、観る、話し合う・語る、記録する、支えることなども新しいスポーツの形ではないかと思う。

(感想)オリンピック種目などになって統一規格のようなものができてしまうと、折角の多様な面白さがなくなってしまう気がする。

(感想)個人のなかで解決出来ない矛盾点が多くあるように思える。上手くなりたいということ、ある技術ができればいいということもあるが、自分のやり方でしかなかったり、また、いつでも手軽にできる場所が欲しいと公設の場所を作ってもらおうと、何か大きなものに取り込まれるような感じになるとか。むしろそれを楽しんでいるようなところが凄い。そこが競技スポーツとは違うところではないか。

### < 2 > DUO リーグから東京都ユースリーグへ (中塚) (資料配布)

#### 1. はじめに

(1)問題の所在 (自己紹介を兼ねて)

##### 1) “勝つサッカー” or “楽しむサッカー”

自分は大阪で育ってきて、小学生の頃は少年サッカーなどない時代だったのでストリートサッカーを、中学校に入ると学校体育の中で競技としてサッカーをしてきた。熱心な教師に指導された中学校から、高校では一転、3 年生のキャプテンが中心になって練習メニューを決めるような民主的な部活に入った。最初の練習で先輩から「サッカーには“勝つサッカー”と“楽しむサッカー”がある」と言われ、それまで競技としての“勝つサッカー”しか意識していなかったので不思議に思ったのを記憶している。

自分がキャプテンとなり、練習を厳しくすると、「中塚さんの“勝つサッカー”にはついていけません。僕らは“楽しむサッカー”をやりたいんです」と下級生が多数辞めたことがあった。このとき、最初の練習で言われたことを思いだした。

##### 2) 100 人の“チーム”？

筑波大学に進学し、伝統ある蹴球部に入った。部員は当時 100 人おり、レベル別に AB チームと CD チームに分かれ、時間帯などを分けて練習していたが、モチベーションの違いや集団への帰属意識の違いが生じる事を体験した。

大学ではスポーツ社会学を専攻し、“勝つサッカー”や“楽しむサッカー”などスポーツの多様性や、スポーツ集団を“チーム”という概念だけで捉えることには無理があり、“クラブ”という多様な人材の集うネットワークとして捉える必要があることを学んだ。

### 3) アマチュアなのに“引退”？

教員となって指導する側にたったとき、改めて従来の慣習に違和感を覚えた。新入生は 4 月に入学するが、部活が決定し落ち着いて活動できるのは夏近くになってからであり、下級生のうちは試合に出場する機会も非常に少ない。2 年生になって上級生が“引退”するとようやく自分達が試合に出場できるようになるが、翌年 5 月中旬のインターハイ予選で敗退するとそれで終わって“引退”する。「3 年間部活を頑張った」というが、試合に出ているのは実質 1 年間だけであり、“引退”して“OB (OLD BOY)”となる。アマチュアなのに“引退”がある。15 歳や 18 歳が“OLD”と自称する。おかしいのではないか。

試験前には部活が休みになる慣習も、さっぱりわからない。普段から勉強と部活の“両立”を唱えているのに、試験前になると急に部活が休みになるのは矛盾している。

## (2)課題解決のために

### 1) 「スポーツ」の観点から見直そう！(資料)

### 2) 「学校」の枠を越えれば解決できる！

近隣の学校をみると、グラウンドがない学校や、部員数の非常に多い学校、反対に少ない学校など、個々では解決できない問題を抱えている。施設のない学校の生徒が施設のある学校へ練習に行ったり、部員数の少ない学校どうしが連合チームを作って出場したり、学校の枠を越えてお互い協力すれば解決できるのではないか。

それが「リーグ」という発想につながっていく。

## 2. DUOリーグの理念(=U-18 東京都サッカーリーグの理念)(資料)

- 1) 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ…スポーツの生活化：スポーツが生活の中に無理なく位置付けられる
- 2) 「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成…チームからクラブへ：レベルやニーズに応じて誰もがゲームに参加でき、多様な複数のチームによってクラブが構成される
- 3) 強いチームとたくましい個の育成…レベルやニーズに応じた環境
- 4) スポーツをささえる人材の育成…自主運営と受益者負担

## 3. DUOリーグから東京都ユースリーグへ

### (1)DUOリーグの歩みと成果 (資料)

1996 年度より、前期 (1 学期)・後期 (2 学期) の年 2 回のリーグ戦をスタート (3 学期はオフシーズン～プレシーズン)。最初は 10 チーム、1 リーグ制であったが、チーム数の増加により 8 チームのリーグを複数編成するようになり、1 つの高校から複数チームや、複数校での合同チームなどの登録も可能。また中学生選抜の参加や、OB の活動の場として特別枠選手 (19 歳以上) の設定などのローカルルールを設けている。運営はチームごとに徴収するチーム登録費 (受益者負担、スポーツはタダではない) によってなされており、審判も高校生が担当し報酬を受けるようにしている。スポーツを「する」場だけでなく、多様な人材を育てるため、審判講習会やトレーナー講習会などの事業も行うようになった。

近隣の地区からも参加希望の学校も現われるが、各地域でのリーグの開催を促し、組織の作り方や運営方法を提示してきた。

## (2) DUOリーグのビジョンと東京都ユースリーグ (資料)

DUOリーグの理念と活動を、底辺から、横にも縦にも広げていくことを当初から考えていた(ビジョン)。一方、ユース年代のトップレベルでも、北海道・東北・関東など各地域で「プリンスリーグ」の名称でリーグ戦が2003年度より実施された。トップでリーグ戦ができ、DUOリーグなど底辺でのリーグ戦がある。間をつなぐ「東京都ユースリーグ」を創ろうということにここ数年取り組んできた。レベル別のリーグが階層的にある「衛星型サッカー環境」が目指す姿である。

リーグ戦とカップ戦を整備し、イベントとシーズンを整理することで、各自のニーズに合わせて年間を通して多様な(多種目との関わりも含め)スポーツライフが可能になる。

U-18 東京都リーグは、2005年度に完成する構想で、2004年度からの開幕へ向けて準備を進めていた。完成すれば、JFAU-18 関東プリンスリーグの下にU-18 東京都リーグが1~3部まであり、これまで8年間続いているDUOリーグは、その下部の「第2地区リーグ」に位置付けられる。

## (3) 公認リーグ発足への険しい道のりと2004年度の中止決定について

2004年4月3日、アミノバイタルフィールドでU-18 東京都ユースリーグが開幕する予定であったが、残念ながら初年度(2004年度)は、オフィシャルリーグの形では開催できなくなってしまった。

詳細をここで述べることはできないが、簡単に言うと、学校体育と生涯スポーツの狭間の問題となる。我々は学校体育としてでなく、生涯スポーツの領域の活動としてリーグ展開していこうと考えていた。しかし、そこに学校団体が関わろうとする場合には校長の許可が必要になり、校長が判断するための材料を提供しなければならない。しかし高体連や教育委員会との折衝の中で「判断できるだけの材料がそろっていない」と指摘され、学校としての関わり方が難しいとするなら無理にはじめるのではなく、2004年度の開催を見送ろうとなったものである。ただ、オフィシャル大会ではないが、練習試合の組織化の形で、準備したものはやっといこうとしている。DUOリーグも従来通り行われる。

オフィシャル化をすすめる中で、やりにくさを感じていたのは事実。例えば協会公認となるから「特別出場枠」といった“遊び心”が入り込む余地はなくなってしまう。また、警告・退場が他のオフィシャル大会に影響するため、情報の一元管理が必要となり、この運用が非常に煩雑である。このような様々な壁にぶつかっていた。公認化に至らなかったのはきわめて残念だが、「歯磨き感覚」ということからすると、むしろオフィシャル大会でなくてほっとしたと感じるところもある。

## 4. 学校運動部の可能性と限界ー筑波大附属高校サッカー部を通してー (資料)

ところで、筑波大附属高校サッカー部は、競技志向のアスリート部門、レジャー志向のフットサル部門、そして女子部門がある。それぞれの部門は単独のチームとして活動しながら、3部門あわせた一つのクラブとして、校内フットサル大会の開催など、学校内におけるフットボール普及活動を毎年継続して企画・運営している。

東京都サッカー協会では、U-18の公認のフットサル大会を年2回開催しているが、昨夏の大会ではサッカークラブから3チーム、及び校内フットサル大会を機に結成したチームが1チームの計4チームが、筑波大学附属高校から出場した。即席チームの方が、サッカークラブのチームよりも上位だったのは悲しかったが、底辺は広がっている。女子部門も東京協会公式大会に出場の予定である。

この他にもクラブとして広報誌を発行するなど、様々な活動を行っている。

(質問)他のクラブでも広報誌の発行などの活動をしているのか。

中塚：他のクラブでは聞かない。他校の例を聞いても、顧問が作っているところはあるだろうが、う

ちの部では部員自身で担当を決めて作成しており、(顧問の)私はほぼノータッチ、原稿を一応チェックして印刷するだけである。また女子部門ではHPを作って情報発信している。このようなことを学校時代にしてきた連中は、恐らく卒業してからもこういうことに興味を持って関わってくれるのではないかと思う。それが長い目で見ると、スポーツだけでなく、アートなど他の分野でも、「ささえる人材」になるのではないかと思う。

### 【3】ディスカッション

#### 1. オフィシャル化することによるメリット・デメリット

- ・ リーグを公式のラインに乗せたいという思いはある。公式戦になると、平等にサービスが行き渡るようになり、今まで指をくわえて見ているしかなかった人たちも参加の可能性が開けることがメリットとして挙げられる。また、今までなかなか借りられなかったグラウンドが、公式大会ということで借り易くなるということもあるだろう。一方、足並みをそろえなければならないというややこしさが出てきて、当初持っていた遊びの良さがなくなっていく恐れがある。しかしこれは、あるレベルまではローカルなルールを認めるといった形で整理出来るのではないか。これから着手すべきことだと思う。
- ・ サッカーの世界では、国際サッカー連盟(FIFA)という非常に大きな統括団体があり、一つの国・地域には一つの協会しか認めておらず、ボクシングのようにWBA、WBCと複数統括団体が存在することはできない。オフィシャルのサッカーになっていこうとすると大会でルールが違うということは出来なくなる。
- ・ スケートボードでも世界基準ということになると、どこかで捨てないといけない、切られるものがあると思う。いいこともあるだろうけど、面白さも半減してしまうかもしれない。
- ・ インフォーマルな世界では、自己決定・自己責任で全く問題ないだろう。しかしフォーマルな公式戦になると、責任の所在が校長や主催者に広がってくる。公式化することによってみんなでやっっていこうということにはなるが、一方で個々の当事者意識が薄れ、本来自己決定・自己責任で始めたはずのものから離れそうになることが、矛盾でありジレンマである。
- ・ 筑波大附属高校のサッカークラブでは、オフィシャル化する部分はあっても、フィールドが分かれるだけで、上下関係とかではなく、お互いの行き来ができる、どこかゲリラ的な状態が残っていることがとても面白く思える。しかし、アスリート部門から分かれてフットサル部門をつくった頃の連中はいろいろ活動したが、4~5年も経つとルーティーン化し、はじまった頃の活力が失われていく。また、フットサル部門のなかでも真剣にフットサルをしたい者とレジャー志向の者に分かれていこうとする。永遠の課題かもしれないが、卒業したOB・OGも学校の施設を使ってスポーツができる「引退なし」の状態になり、身近にモデルがいるような環境になれば解決するのではないかと考えている。卒業すると部外者になってしまう「学校」という壁を越えなければならないのではないか。
- ・ 私はスポーツをしないので、歯磨き感覚でと言われてもやはり歯磨きではなく、ハードルが高い。本当にどうしようもない人(素人)は、歯磨きさえもしないのではないか。スポーツ嫌いとしては、ちょっと身体を動かしたいなというときに、歩いたりできるだけいいかなと思う。私にはオフィシャルというと、決まりがあって手続きなど非常に面倒くさい感じがしてしまうので、筑波大附属のサッカークラブが歯磨き感覚とオフィシャルを両立させていこうとすると驚きを感じる。

#### 2. それぞれのスタイルをどのように扱うか

- ・ 我々を含め日本人の捉え方は、ちょっと頭が堅いのかなと思う。統一規格のサッカーだけがサッ

カーであるかのように我々は思い込まされているようなところがあるのではないか。空き地でやっているのもサッカーだし、母親が子どもとボールを蹴っているのもサッカーだろう。ただ統一規格のサッカーがしたければ、一定の手続きを経て参加するということであって、幾つかの国ではそのようになっている。選手としてやりたい人だけが登録していて、あとは登録と無関係に好きにやっている。こういったことを日本はどのようにしていくのがこれからの課題でもある。

- スケートボードの考え方にスタイルというものがある。それは個人特有の手の上げ方などで、上手いけどスタイルが変な人もいれば、下手だけどスタイルがかっこいい人もいる。サッカーでも個人や組織のスタイルなどあると思うが、それぞれの違いを認められると良いのではないか。
- サッカーでも、それぞれのクラブが独自の視点で選手を発掘して、独自のやり方でトレーニングする方が面白いだろう。しかし一方で、それでは日本全体の水準がなかなか上がらないということから、指導者養成のための指針やマニュアルができていない。全体の指導レベルは上がり、できない子の数は減ってきて、それは良いことだか、一方で、“とんでもない奴”が出にくくなっているという問題が競技においてある。
- サッカーでは、それぞれの指導現場でどのくらい基礎トレーニングをやっているのか。私は和太鼓をやっているのだが、2時間の練習で2万回以上打つことになる。上げ下ろしを繰り返すのだが、間違えた打ち方をすると肘などを傷めることになり、基礎トレーニングをやらないと怪我をして面白くない、つまらないといったことにつながると思う。上手くなるまでに3~4回は医者にかかる、和太鼓を始めたときに言われた。ましてサッカーは走るのだから、より基礎トレーニングが必要なのではないか。道路でスケートボードをする若者達を見かけるが、基礎トレーニングをやらないから、ジャンプ力は上がらないし、あまり上手くならない。そして非常に危険に見える。そういったことを誰かが教えなければならぬと思うのだが。
- サッカー協会における指導者養成では、スポーツ医学の基礎知識を、一番初めのコース（少年少女指導者養成講習会）でも学ぶようになっている。スケートボードでも、指導者がいれば改善されると思う。しかし指導者がいないから面白いという面もあるだろう。
- サッカーでは怪我はどのくらい保証されるのか。アメリカでは、アメフトなどでは大学でやっていて重度の怪我をした場合一生保証があるとも聞くが。
- それはどこでプレーするかによる。学校の部活動（学校教育の中）でやるなら、スポーツ振興センターの災害共済寄付（保健室で書類を書くもの）が受けられる。生涯スポーツでやるなら自分で保険（スポーツ安全保険など）に入らなければならない。草サッカーの人たちは普通は保険に入っていないだろう。
- 草サッカーでもスケートボードを始める人たちも、怪我をあまり考えておらず、誰かに怪我の責任を負わせようとは思っていないだろう。
- サッカーや和太鼓はコントロールされた（危険なものを取り除いた安全な）場所で行うが、ストリートでやるスケートボードは、不規則で何が危険か分からないような、規格されていない場所でやるのが大きな相違点だろう。それは、登山やフリークライミングやスキーにもあるかもしれない“危険性”が魅力になっているのではないか。また最近では、囲われて、ある程度規格化された場所ができていても関わらず、棒を飛び出しストリートに出てくる理由は、一つには井関さんが発表されたような「この街のこの場所」というローカリティー、コントロールされていない喜び、そして、痛みを自慢する気持ちがあるのではないか。ストリートでやるスケーター達を研究対象にしている研究者がいる。上手くはなりたいたいが、他人に教わりたいたいわけではなく、自分で工夫して攻略していくのが楽しい。自己満足でしかなく稚拙に思える部分はあるかもしれないが、それが魅力なのだろう。

### 3. アートとスポーツの比較

- ・ アートにもオフィシャルは一応あるともいえる。日展とか。リーグというよりはトーナメントだが。ただ、「現代アート」と言われるジャンルではあまり確立されていない部分もあるし、いきなり世界のフィールドに飛び出しちゃう人もいる。日展とかで勝ち上がっていても行き止まりになる人は沢山いて、むしろそうでない所から出てきた人ばかりが実際には世界のフィールドで活躍している。アートは決まったルールがなく、自分でどどんルールを作り変えていくことができる。これが、ルールがない世界の面白さだと思う。オフィシャルなものを常に組替えて読み替えて、自分で作り変えるのが近代美術のあり方だが、自分の組替えている制度といったものを客観的に捉え直しながら、そこで何ができるかということを繰り返すのは表現の重要なところである。約束事がないのだけれども、ひとつの流行や型があり、そこからどうするかといったところがスポーツと繋がる場所ではないか。
- ・ 私はすごく裾野は広いと思っているが、アートを知らない人からすれば、ギャラリーに入ることや美術館に行くことが日常的でなかったりする。アートとただでさえ非常にハードルが高く感じられることがあるだろう。コミュニケーションをテーマにして描いてはいても、それを「コミュニケーションだよ」といって描く人はあまりいないので、そこをどのように越えていくか、一般の人とどう関わっていくのかをいつも考えるという点で、スポーツとかなり近いのではないか。
- ・ フィールドの中にいるのだけれども、その中にまた別のフィールドを一つ描いたりするということが、同じレベルで存在すると思う。ただ裾野を広げるということなら日展の会員を増やせばいいのだけれど、そうではなく、約束事はあるのだけれど違う事をやった人も入って来ることができ、ジャンルを混ぜるといった仕組みを作ることは重要ではないかと思う。
- ・ 日本サッカー協会は、アートでいう日展のような気もする。サッカー協会はサッカーをやる上でとても大きな存在なのだが、ブランド（日展、サッカー協会）自身はオフィシャルで、誰でもコミュニケーションできていると思うが、思うほどにはコミュニケーションできていないのではないか。
- ・ 日展とは違ったところでやっている人は沢山いて、現代アートは約束を自分で作り出すものだと私は思っているので、日展という一つの審議会のようなところは、色々な意味で表現を考えたときに、やはりそれは約束の中にあるのであって約束を超えていないのではないかと思ひ、あまり興味が湧かない。かといって一方で、現代アートを全然必要としない人もいるし、どっちがいいとか悪いとかではないと思う。日展というのは、ローカルなのに自分がグローバルだとある種勘違いしている世界ではないかと思う。たとえばここ向島という地域でスポーツを考えるというようなローカルなことを掘っていくと、急にグローバルなものが出てくる、金鉦が眠っていることがあると思う。
- ・ サッカーの場合、国際サッカー連盟（FIFA）はグローバルであり（日本サッカー協会はグローバルに繋がりそうだが）、日展は行き止まりである点は、違う気がする。
- ・ 日本サッカー協会が登録人口 200 万人に増やそうというアクションを行っている。登録というと敷居が高いのでサッカーファミリーの仲間入りをするという感じだが。日展の会員を増やそうというのに少し近いかもしれない。だが一方で、スポーツや芸術を広めていく上では、そういったアクションも必要ではないか。例えばサッカーというと嫌いな人からすればマニアックな話かもしれないが、サッカーファミリーが人口の何割かいるとなれば、社会的に大きな影響力があるだろうし、個人に対しては意味がないかもしれないが全体をどのようにしていくかどういふときに意味が出てくると思う。

#### 4. スポーツ・アートの捉え方

- ・ スポーツでも裏方さんもいれば、芝生を育てる人もいるし、スタジアムを設計する人もいる。それを含めてスポーツの世界だと思う。アートも同じで、創る人だけでなく、わからないけど観に来たという人や、サポーターのようにボランティアで手伝ってくれる人まで含め、アートの世界



であり、そういう関わり方って楽しいと思う。それもスポーツの、あるいはアートの楽しみだというのが真っ当なことではないか。いろいろな隙間があって、皆それぞれに楽しみ方が見つけれられる仕組みは大切だと思う。

- アートでもスポーツでも、大切なことは、やっている本人が楽しむことだと思う。日本人の悪いところは、上手くないといけない、上手くないと楽しくないと思い込んでいるところだと思う。たとえば草サッカーに参加して、入らなくてもシュートを打つことを楽しむなど、その場を楽しんだ人が勝ちではないか。
- DUOリーグや東京都ユースリーグのオフィシャルな方の話で見えにくくなったかもしれないが、歯磨き感覚のとは、ボールが転がってたから一緒に蹴ってみようか、試合で人数が足りないからそこにいた子どもを入れて試合をしようかといったところにあるのではないか。
- プレーヤーとしてだけでなく、サポーターとしてであったり、ジャーナリストとしてだったり、自分の居場所を確保する、暮らしを作る一部であることが、歯磨き感覚でスポーツやアートをするということではないか。たとえば、あるスケーターはいつも街のなかでどこかしら挑戦したい場所、自分の居場所を探しているような感じがある。
- スポーツと遊びの線引きをしようとすると窮屈になるような気がする。サッカーに興味があればサッカー協会に登録しなくても自分の部屋でリフティングしたり、アートでも展覧会などでなくても自分で公園でデッサンをするだけで関わっていることになり、自分の中で変な線引きをしなければ良いのではないか。

## 5. 歯磨き感覚でスポーツ・アートができるために

- 歯磨き感覚でサッカーなどができる場所が減ってきていることが問題だろう。
- あちこち歯抜けのように空き地があるが、入っちゃいけない、小学校でボール蹴っちゃいけない、場所があっても借りられない。誰もが芝生でやりたがるはずなのに土のグラウンドの脇にある芝生では球技をやってはいけない、と非常にハードルが高い。
- 基礎は重要で、基礎を教えられる人間・人的資源はあるのに活用されていないように思う。毎年1000人くらい美大生が出ているはずなのに、あまりそういった方面に行っていないのではないか。
- スポーツやアートが日常に根付いてないと感じる。歯磨き感覚でスポーツやアートするには、一人一人が越えていこうとする気持ち次第だと思うのだが。
- 「歯磨き感覚でスポーツはできない」ということにならないか。というのは、歯磨きは一人でできるが、スポーツは複数人必要で、それには外の場（公共の場）を使わねばならず、合意形成がある。そうすると難しくなる。今まさに流行っているゲームキューブやプレイステーションなどは歯磨き感覚で出来るもののような気がする。
- ゲームも一つの制度で、それは街中でも作れるのではないか。
- 歯磨き感覚とは、歯磨きをしないと痛いと感じることだと思えるが、最も痛いと感じたのは選択肢が少なかったことだった。様々なものに触れる機会が遅く、なかなか上達しないまま、面白く感じられなかったりした。歯ブラシを選べるように、選択肢が数多くあったならと思う。痛いと思うかは自由だと思うが。
- 施設は使い放題で同世代の仲間も多く、安全管理は徹底している「学校」という恵まれた環境で、学校体育の使命は「歯ブラシ」の種類や使い方を教えることなのかなとも思う。学校体育は、するスポーツにばかり特化していて、体育のせいでもむしろスポーツが嫌いになることさえある。するのは興味がないが、観るのは好きだとか語るのが好きだというような、スポーツの面白さを伝えなければならないと思う。
- 美術でも鑑賞教育というものがなされていないと感じる。美術・アートは嫌いだと言う人がいるが、逆にそういう人が、他に沢山ある楽しさを知らず、ステレオタイプなものが美術だと思って

いたりする。高度なレベルの操作をしないとアートではない、スポーツではないと勘違いしているのではないか。

## 【報告作成者（上間匠）感想】

スポーツでもアートでも、そこに色々な隙間があり、そしてその土台には一人ひとりがその隙間で動いたり枠を越えたりしようという気持ちがあることが、多様な楽しみ方が出来るのに必要であることが再確認できたばかりでなく、またその隙間や動きこそが、約束を新しく作ったり組替えたりするのだという考えに新鮮さを感じた。